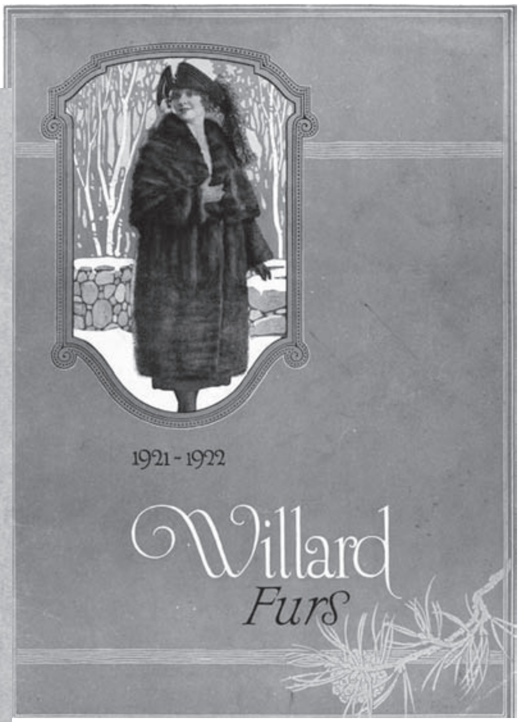
KU 図書館だより
2012.7 No.137

■ 神奈川大学図書館
横浜 〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋 3-27-1 TEL(045)481-5661(代表)
平塚 〒259-1293 平 塚 市 土 屋 2946 TEL(0463)59-4111(代表)
http://www.kanagawa-u.ac.jp/library/



1900 年代のアメリカの通販カタログ
神奈川大学図書館所蔵

目 次

■ 新図書館長のメッセージ
図書館長 / 山田 徹 ・・・2頁
平塚図書館長 / 鳥居 徳敏 ・・・3頁
■《連載》雑誌『旅行満洲』
－植民地ツーリズム雑考－その 2 ・・・4頁
■《連載》図書館のススメ（その 11）
都立中央図書館 ・・・5頁
■ 2012 年横浜図書館展示
「アメリカの商品カタログに見る
大量消費社会の誕生」 ・・・6頁
■ 図書館の所蔵資料紹介
"WHEN THE WIND BLOWS" ・・・7頁
■ 図書館からのお知らせ
今号の表紙
編集後記 ・・・8頁

本の歴史を変えた人々②

ウィリアム・モリス
（William Morris, 1834-1896）

現代工芸デザインの父。産業革命による機械化で、粗悪な製品が大量に生産されることを憂い「美しくも役にも立たないものを家の中にひとつでも入れてはいけない」との名言を残し、生活と芸術の融合を目指した 19 世紀アーツ・アンド・クラフツ運動の創始者である。

1891 年「理想の書物」を作るためにプライベート・プレス「ケルムスコット・プレス」を設立、労働が創造の喜びと結びついていた中世の職人の手仕事を理想とし、自らデザインした活字、手漉きの紙、手動の印刷機による本作りを行った。ケルムスコット・プレスで作られた『チョーサー著作集』は、愛書家の間では世界三大美書と言われている。

新図書館長からのメッセージ

大学図書館をめぐる雑感と若干の抱負

神奈川大学図書館長　山田　徹

「図書」には長年なじんできたが、「図書館」の実務にはなじんでいるわけではない。そこで新米の館長として、昨今の図書館事情をめぐりいくらか感じている事柄と、いくばくかの抱負を述べることにしよう。

大学の図書館は転機を迎えているとよく言われるが、それは常に言われてきたことであり、この点は時代ごとにたえず新たな課題が生まれているということであろう。それでも、ここ数年を一つの単位とすれば、本学の図書館を含めて大学図書館はやはり大きな転換期に立っていると思われる。

最大の問題は、無論、今に限ったことではないが大学生の本離れが深刻の度を増しているということである。テレビ、ゲーム、携帯やスマホでの通信や検索の常用といった生活習慣は、もはや本による知識の習得という脳活動を退化させているかのごとくである。これに対する特効薬は存在しないが、ここで翻って本学の学生諸君の思考・行動様式を見ると、案外と「現場感覚」ともいうべき現実の場で進行中の事柄から得られる新鮮な感覚の涵養に、一つの活路が見出せるかもしれない。例えば、今般の震災ボランティアにみられる学生諸君の反応と、それを自らの認識にしようとする態度である。ここから「帰納」される知識や議論は、もはやグーグル検索などの「単純作業」では到底習得できない思考の領域に入るだろう。筆者を含めた教員側の努力にもよるが、この点などに図書館の大いなる活用が期待されるというのは、筆者の立場から見た過大な期待であろうか。

大学図書館が抱えるもう一つの大きな問題として、外に向けた開放性の問題がある。筆者には実態はまだ詳らかではないが、本学の図書館でも様々な努力が試みられているはずである。「地域に開かれた大学」という理念からすると、例えば地元の公立図書館との相互利用・閲覧や共同の催し物の開催、大学紀要から教材までの開放を含めた知的拠点としての市民への情報発信が最重要な課題になるだろう。実は、本学の図書館は、県内でもいち早くこれらの制度を導入しており、また、研究目的のためだけでなく、一般利用という点でも、高校生を含めて、広く市民に開放されている。公立図書館の中では、神奈川県立川崎図書館は社史の

豊富なコレクションで知られているが、経営学部や経済学部の学生諸君にとっては、それらは貴重な「現場」の一部になるだろう。

図書館の転換期における最大の話題の一つは書籍・雑誌などの電子化の問題だが、収納スペースの関係もあってこれは早急に進めなければならない課題である。電子図書や電子雑誌のインターネット化は、図書館の入館者数を減らすかもしれないが、これはこれで受け止めなければならない現実である。ただ電子情報は長期保存の点で問題を抱えているともいわれる。いずれにせよ電子化の問題は、紙媒体の文化を前提としてきた図書館のシステムを問うという本質的な問題を孕んであり、この問題については改めて考察することにしたい。

さて、図書や雑誌の数が増大すると、長期の情報的価値を持たない書籍・雑誌の除籍の問題が生まれてくる。この除籍が本学の図書館でどの程度の規模と頻度で行われているのかはまだ把握していないが、除籍の際は、図書・雑誌の「生命力」をめぐり図書館員や専門研究者の眼力が問われることになるだろう。図書館施設の拡大の問題が他の一面としてあるが、図書館は図書・雑誌を保存する機能を持つとともに、現代の必要な情報をたえず回転・更新させなければならないという使命ももつわけである。

以上、昨今の図書館事情をめぐる感想と抱負を雑駁に述べてきたが、筆者としては、要は、本学構成員の諸氏や諸君が、本学の誇るべき施設である図書館を一層活用されることを心から願う次第である。

私の推薦する本

松沢哲郎『想像するちから―チンパンジーが教えてくれた人間の心』（岩波書店）
R. アクセルロッド『つきあい方の科学―バクテリアから国際関係まで』（松田裕之訳、ミネルヴァ書房）
齊藤誠『原発危機の経済学』（日本評論社）

新図書館長からのメッセージ

デジタル化の功罪

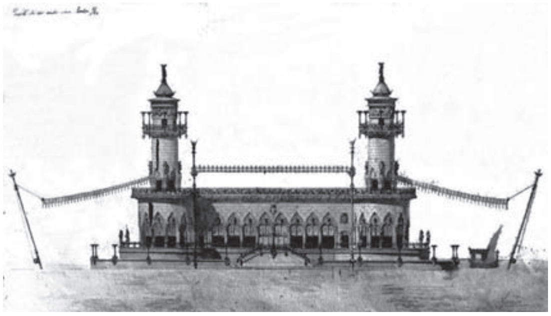
神奈川大学平塚図書館長　鳥居　徳敏

世のデジタル化の波は凄まじい。本学図書館も蔵書スペースの狭隘さから電子ジャーナルへの全面移行へと舵を切った。そのデジタル化に貢献するはずのIT関連の出版物が蔵書スペースを食い潰す。何とも奇妙だ。ネット社会は確かに便利である。家に居ながら19世紀の雑誌を見ることができる。体力を消耗することもない。「苦あれば楽あり」だが、「楽あれば苦あり」でもある。全身全霊とも言う。頭だけでなく、体で覚えることも知らなければならない。

私のスペイン遊学は11年（1973-84）と長い。遊学の質が学習から研究へと変わるころには、国立図書館などでの調査が主たる生活となる。

当時の重要な研究テーマのひとつが、19世紀後半から3四半世紀の時代背景の探求にあった。この時代は雑誌（月刊誌、隔週刊誌など）が雨後の筍のように誕生し、イギリスでは発行部数100万の新聞も出現した。紙媒体による情報化時代の到来である。これらは時代調査に不可欠な材料を提供した。写真図版が一般化する世紀末までは、視覚情報はもっぱら銅版画。したがって、紙面は大判（小机程度）で、製本されると巨大化した。個人所蔵にするような代物ではない。図書館に行かざるを得ない。日に何度も館員を煩わせ、相当量の雑誌に目を通す。当初は館員のしかめっ面に辟易したものだが、通い続けるうちに笑顔に変わり、親しい間柄になる。

日々発見される貴重なデータをどのように記録するのか。メモを取るにはデータが多すぎ、その手間暇がかけられない。高価になるが、コピーに頼るしかない。コピー機は当時まだ新兵器で、専属の職員が配置されていた。製本された雑誌数巻を見終える度に、コピー申込用紙に必要事項を書込み担当者に依頼することになる。職員には「またか」といった顔つきをさせられる。スペインのルーズさと怠慢さとでもいうべきか、途中からは自分でコピーし、職員に枚数を告げるだけで済むようになり、時間と煩わしさが半減する。



ガウディ、学生時代の課題設計「桟橋」1876（著者撮影 1979）

専門の建築には図面・図版の写真データが不可欠。写真はさすがに高額だ。カメラを常に持参し、許可がでれば撮影できる態勢を取る。新聞・雑誌の掲載図版はもちろんのこと、貴重な古書やオリジナル資料なども撮影、かつ自ら現像・焼付けまでこなす。特筆すべきは、ガウディのオリジナル彩色図面（1870年代）を燦然と輝くスペインの太陽光で撮影したことだ。それらの図面は現在サグラダ・ファミリアの薄暗い展示室のガラス・ケースに納まっているのだが、色彩は相当色褪せた状態にある。

これらの経験は頭脳よりも肉体労働に近い。頭でなく「体で覚えた」という実感を持つ。

今では貴重な資料に触れることはできない。当時の雑誌を見ることすら容易ではない。保存第一ですべてがマイクロフィルム化され、フィルムリーダを通して見るしかない。最近はデジタル化され、多少は見易くなったものの、実物を体で見る体験からは程遠い。デジタルの世界はバーチャル世界で、現実の世界ではない。しかし、デジタル世界はさらに進化し、急速に現実の世界に接近することであろう。「昔は良かった」が老人の戯言になることを願う。

私の推薦する本

西田幾多郎『善の研究』（岩波文庫／講談社学術文庫）
日本人初の独創的西欧型哲学の出現とされる本。禅的な哲学体系。極めて難解。

オルテガ・イ・ガセット『大衆の反逆』（神吉敬三訳、角川文庫／ちくま学芸文庫）
今日の大衆社会を予言したスペイン哲学者による名著。

セルバンテス『ドン・キホーテ』（牛島信明訳、岩波文庫）
スペインならではの壮絶な悲喜劇。聖書に次ぐロング・ベストセラー小説。世界54か国の著名文学者100人による「史上最高の文学百選」（2002）で1位。

雑誌『旅行満洲』 ～植民地ツーリズム雑考～　その二

中 村 裕 史（図書館総合サービス課）

前回は雑誌『旅行満洲』の変遷や発行母体となった組織を中心に検討した。今回は複数の資料を参照しつつ雑誌の内容に踏み込んでいくための視点を獲得したい。

1.「光」と「闇」が共存していた時代

ケネス・ルオフは次のように述べている「戦後になって日本では、ある神話が定着するようになる。戦争末期から戦後占領期にかけての悲惨な時期の記憶が、それ以前の時期にもそのままあてはめられ、戦時はずっと暗い谷間の時代だったと記述されるようになった(序章)」[1)]。ルオフは“紀元二千六百年”を間近に控えた時期の観光の活況に注目することで、上記の見方をくつがえそうとする。戦時中も多くの日本人が全国を旅し、旅順などの外地を訪れていた。“暗い谷間”の時代とひとくくりにするのは誤解を生みやすく「光」と「闇」が共存していた時代と捉えるべきである。荒山正彦の『満支旅行年鑑』を使用した旅客数の分析からも、観光の活況を知る事ができる[2)]。昭和14年４月からの１年間に、416団体、17,015人の旅行者が、鮮満支案内所の斡旋によって満洲への団体旅行を実施している。団体は主に学校団体、県議会議員、町村長、商工会などであり、学校団体は主に修学旅行を目的としていた。その後、次第に興亜青年勤労報国隊などが主流となる。

第四巻第六号より
国都新京忠霊塔

2. 見られる客体から見る主体へ

戦時下における観光推奨の理由はどこにあるのだろうか。昭和14年版『満支旅行年鑑』掲載の「観光事業の意義」を見てみたい。曰く「世は挙げて非常時である。その非常時下に、「観光」を語ることは凡そ時局に応しくない問題であると考えるかもしれない。然し（中略）単に風光を観るばかりでなく、その国、その地方の文化、制度、産業等凡有る自国の優れた点を内外に顕揚し（中略）、（その結果観光は）国際的に見れば「国の光を示す」事になるのである。（中略）観光事業は立派に現下の時局に於ける国民運動の線に沿うものとして存在し得るのである」。厳しく質素倹約が指導されるなかにあっても、日本帝国の最前線、新しい勢力圏を見せることは、植民地事業の重要性を理解させ、満洲・中国政策の正当性を認識させるものと位置づけられていた。無論、国策としての強制だけで成功するわけではない。国民の潜在的興味関心とナショナリズムの興隆が下地にあったうえでのことである。

さて、見る･見せる観光により、何を成そうとしていたのだろうか。有山輝雄は次のように述べている、「エキゾチックな風俗によって日本人は欧米観光客によって見られる客体であった。（中略）日露戦争後、日本人が海外観光に出るということは、今度は見る主体になろうとしたということである（15頁）」[3)]。欧米においては帝国主義が見る主体としての海外観光旅行者を生み出した（見るものの絶対的優越）。日本人も見られる客体から見る主体へと転換することで、西洋列強と肩を並べる帝国民たる意識を持とうとした（幾重にも屈折し、時には卑屈な眼差しではあったとしても）[4)]。

第四巻第六号より
乗車口への通路より見た大連駅正面

上記『満支旅行年鑑』に「国の光を示す」という表現があるが、『旅行満洲』やその他の出版物においても“観光”に含意されたこの思想が貫かれている。

3. 満洲観光のテーマ

当時の“観光”は政治的行為である。ルオフによれば満洲観光は、主に四つのテーマを伝えていたという（207頁）。

1．満洲で日本が特殊権益を有するのは、日本が戦場で大きな犠牲を払ったからという考え方。
2．後進地域に近代化をもたらした日本人の役割。
3．満洲に住む現地住民の集団が遅れた状態に置かれていること。
4．日本人がアジア文明の保護者たらんとして、現地の歴史遺産の保護に努めているということ。

『旅行満洲』や当時の旅行案内に見られるツアー内容とコースは、まさに上記四つのテーマを効果的に伝えるために仕組まれている。これは観光客が自ら求めたものでもある。観光客は各種旅行案内等を通じ、事前に見るべきものを学習する。ブレンドンが述べるように、「観光tourismとは、よく知っているものの発見だということである。これに対し、旅行travelとはよく知られていないものの発見であり、探検とは知られていないものの発見である（117頁）」[5)]。これは、満洲ツーリズムにもそのまま当てはまる。

次回はルオフが提示した四つのテーマと、見る主体と見られる客体の関係を考慮しつつ、雑誌『旅行満洲』の内容に踏み入って行きたいと考えている。

1）ケネス・ルオフ著；木村剛久訳『紀元二千六百年』朝日新聞出版,2010
2）荒山正彦（研究代表者）『近代日本における「満洲」ツーリズムに関する研究』（科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書）
3）有山輝雄著『海外観光旅行の誕生』吉川弘文館,2002
4）これは、1906年に朝日新聞社が「戦勝国の民にふさわしかるべき豪快の挙」として企画した“満韓地方巡航船”から変わらぬ姿勢である。
5）ピアーズ・ブレンドン著；石井昭夫訳『トマス・クック物語：近代ツーリズムの創始者』中央公論社,1995

図書館のススメ その11

東京都立中央図書館

有栖川宮記念公園

東京メトロ日比谷線広尾駅を降り、有栖川宮記念公園を抜けていくと、白い建物が見えてきます。それが東京都立中央図書館です。この図書館は資料が豊富で、都民に限らず誰でも利用することができます（年齢制限なし）。神大からは時間はかかりますが、交通の便としては比較的行きやすい図書館ではないかと思います。公共図書館といっても児童書等は所蔵していませんので（都立多摩図書館に所蔵されています）、利用者層は大人が中心です。よって非常に静かな環境が保たれている、広尾というセレブな街にある「大人の図書館」です。

2008年の改修工事以来となる久々の訪問でしたが、書架が木目調になり数が増え、また閲覧席および電源が取れるパソコン用の席が大幅に増えていました。館内マップやサイン等も大きく見やすくなりました。資料や席が増えた分、各フロアにあったレファレンスカウンターがなくなってしまったのは残念ですが（案内ホットラインというフロア案内程度に変わっていました）、どうやら１階のレファレンスカウンターに機能を集中させたようです。

入館の際には、まず受付で入館証を受け取ります。特に申込書への記入は必要ありません。A4以上の荷物の、館内への持ち込みはできません。荷物はコインロッカーにいれて（100円返還式）、必要な荷物は受付で貸出ししている透明のビニールバック（これも以前よりいいものになっていました）に移して入館します。館内にはパソコン席もありますので、ノートパソコンの持ち込みもできます。

フロアは5階まであります。1階には各カウンターおよび「重点的情報コーナー」があります。重点情報コーナーとは、都立図書館が力を入れている「ビジネス情報コーナー」「法律情報コーナー」「健康･医療情報コーナー」「新聞閲覧コーナー」「都市･東京情報コーナー」です。「ビジネス情報コーナー」には就職に関する資料がありますが、都立中央図書館では資料提供だけではなく、「就職活動セミナー；自分にピッタリの企業を探そう」といった中小企業診断士を講師に招いたイベントも数多く行っています。「新聞閲覧コーナー」は全国紙、地方紙、専門紙等を集めており、関東でも有数の規模と使いやすさを誇っています。都立図書館だけあって、「都市･東京情報コーナー」には都内区市町村発行の行政資料等が揃っています。全国の電話帳や『ゼンリンの住宅地図』等もこの1階フロアにあります。資料を複写する場合の受付は1階のみです。各フロアにコイン式コピー機がある訳ではなく、勝手に複写することはできません。複写申込書に必要事項を記入して、資料と一緒に複写受付カウンターに申し込みます。書庫にある資料を見る場合は、資料お渡し・返却カウンターへ資料請求票を出せば、閲覧することが可能です。

東京都立中央図書館

2階には社会・自然科学系の資料と閲覧席（204席）、3階には人文科学系の資料と閲覧席（304席）があります。4階には閲覧席（144席）と企画展示室があります。5階には音声・映像資料室、閲覧席、カフェテリア、喫煙席などがあります。カフェテリアでは有栖川宮記念公園を眺めながら、カレーライス（￥430）、オムライス（￥600）等が味わえます。持参のお弁当を食べることもでき、飲み物の自販機もあります。

都立図書館のサービスは、所蔵している資料の提供や調査研究支援ですが、同時に都内にある公共図書館へのバックアップというのも大きな役割の１つです。市区町村にある公共図書館で所蔵していない資料の貸出しや、レファレンスの支援も行っています。よって、資料の個人への貸出しは行っていませんのでご注意ください。

広尾という街は、なかなか面白いところです。大使館（スイス・ノルウェー・フランス・ドイツ・ルーマニア・クロアチア・パキスタン・中国等々）がたくさん点在していますので外国人も多く、また外国人向けのお店も数多くあります。散策と勉強を兼ねて、セレブな街・広尾に足を伸ばしてみてください。

東京都立中央図書館利用案内

■所在地	〒106-8575　東京都港区南麻布5-7-13　TEL　03-3442-8451
■交通アクセス	東京メトロ日比谷線　広尾駅下車1番出口徒歩8分
■開館時間	月 ～ 金　10：00－21：00　（コピーサービス　10：00－20：00）
	土･日･祝　10：00－17：30　（コピーサービス　10：00－16：30）
■ホームページ	http://www.library.metro.tokyo.jp/Default.aspx

2012年　横浜図書館展示

アメリカの商品カタログに見る大量消費社会の誕生

今回の展示では、主に1890年代から1920年代にアメリカで発行された商品カタログを陳列した。その中でも特に通信販売のカタログは、当時の政治、経済、社会、技術、思想などを考える上でも大変貴重な資料である。通信販売が事業として軌道に乗るのは19世紀末の中西部である。通信販売会社と言えばモンゴメリー・ウォードとシアーズ= ローバックが特に有名である。今回の展示でもMontgomery Ward & Co.の1921年秋冬号とSears, Roebuck＆Co.の1900年号のカタログを正面に据えた。カタログによる通信販売業がもっとも繁栄したのは20世紀の最初の25年間であると言われるが、まさに全盛期のカタログである。

当初、消費を支えたのは、アメリカの広大な地域に散在する農村住人であった。人々には未だ整備が不十分な流通網ゆえに消費の選択肢が限られており、地元の小売商が不当に高い値段を付けても購入せざるをえなかった。時には小売値が卸値の2倍にもなることも珍しくはなかったようであり、消費者は大きな不満と不信感を募らせていた。自動車の普及もまだ遠い時代、消費者の不満を払拭する通信販売が支持を得ることになる。モンゴメリー・ウォードもシアーズ= ローバックも消費者の不満を解消し信頼を得るためのマーケティング戦略を展開した。特にシアーズは天才的な広告・宣伝の才能の持ち主であり、現代でも馴染みの手法の多くがこの時代に確立した。

さて、アメリカの大衆(大量）消費社会の歴史的背景に思いを馳せるのもよいが、単純にカタログの面白さ美しさを味わうのも良い。美しくデザインされたカタログは、現代の無味乾燥な代物とは異なり、一つの芸術作品と言っても過言ではなかろう。エンボス加工、きらびやかな多色刷り印刷、良質の紙。これらのカタログを手にした当時の人々の胸躍る高揚感が伝わってくる。印刷されてから百年以上経つカタログの保存状態が極めて良好である点にも注目していただきたい。カタログは読み捨てるものではなかったのである。

今回の展示をご覧いただいた皆さんは、どのような感想を抱かれたのでしょうか。機会がありましたら是非お聞かせください。

①

②

③

④

①リチャード・シアーズとアルバー・ローバックが1886年に創設した通信販売会社Sears, Roebuck & Co.の1900年のカタログ。大量の商品が工場から直接地方の農場へ運ばれる様が描かれています。

②百貨店チェーンであるメーシーズの春夏カタログ1911年版より。一冊の中にはカラーページが数ページある。斬新なデザインは今なお新鮮。

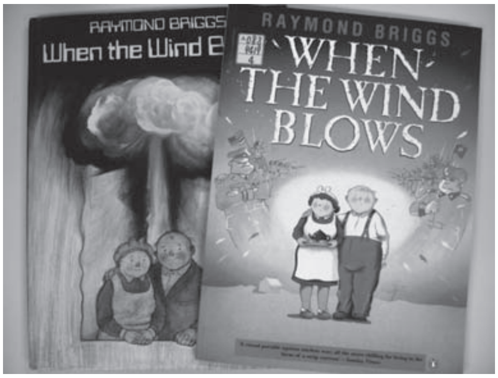
③アルミニウム製の調理器具や生活を豊かにする道具類。Great Northern Manufacturing. Co.『Aluminumware cooking utensils, toilet accessories, …』(1920 ？)

④Sears Roebuck＆Co.の1902年のカタログより。ショットガンやピストルなどの銃器が家財道具や嗜好品と同様に通信販売されている。

展示の様子はこちら　http://www.kanagawa-u.ac.jp/library/organize/exhibition/2012/05/004328/

図書館の所蔵資料紹介

WHEN THE WIND BLOWS / RAYMOND BRIGGS



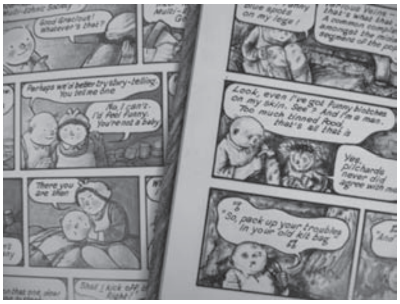
Hamish Hamilton 版 , 1982 年（個人所蔵）左
Penguin Books 版 , 1983 年（図書館所蔵）右

本学図書館では、いわゆる「漫画」というものは購入の対象外である。大学図書館という教育・研究を目的としている施設であることと資金面、資料の耐久性、その他諸々の理由による。

漫画とはどのようなものを指すのか。辞書には“戯画、風刺画、大津絵、鳥羽絵(とばえ)、狂画、カリカチュア、カートゥーン、劇画、コミックなど、多様な呼称がつけられた絵画分野、あるいはその総称*”とある。また“物語などを、絵とふきだしに書き込んだ会話でつづるもの。本来、滑稽さを主眼としたものだが劇画、ストーリー漫画の類も含んでいう*”ともある。本図書館で購入対象外とされ、一般的に漫画といって思い浮かべる「コミック漫画」は漫画の中の一つのジャンルに過ぎず、日本の漫画の元祖などと言われる、国宝≪鳥獣人物戯画≫や本学図書館の貴重資料「パリ・コミューン政治諷刺画コレクション」のカリカチュアなど、図書館や博物館などで所蔵されている漫画は実は少なくない。それらの作品は、その歴史的価値や社会に与えた影響などが評価され、絵画分野の重要な作品として大切に所蔵されているのである。

本書“WHEN THE WIND BLOWS"は、絵とふきだしに書き込んだ会話でつづられた物語－漫画である。作者はイギリスの絵本作家レイモンド・ブリッグズ（Raymond Briggs, 1934- ）。絵本『スノーマン』『さむがりやのサンタ』の作者として知る人は多いだろう。この作品は、世界が核戦争の恐怖に脅えていた冷戦終結前の1982年3月に発表され、ヨーロッパで大反響を呼びベストセラーになった。日本でも同年7月に『風が吹くとき』というタイトルで発行され、発売10日後で初版8千部が売り切れた。映画化もされ日本でも公開されている。

舞台はイギリスの田舎、すでに引退し平穏に暮らす老夫婦ジムとヒルダが主人公である。タイトルページには公共図書館で新聞を読むジムの姿が描かれる。家に帰り戦争になりそうだと心配そうに漏らすジムに対して、ヒルダはあまり気に留めていない様子だ。やがてラジオから戦争勃発を知らせる緊迫したアナウンスが流れ、ジムは政府発行の手引書を見て「簡易核シェルター」を作りはじめる。物語は全編ジムとヒルダの会話で続いていくが、数ページおきに黒い背景に浮かぶ核ミサイル、巨大な潜水艦、戦闘機の群れが敵地に向かう様子が不気味に描かれる。



ついに核攻撃を受けるイギリス。爆風がすべてを破壊する。ドアの扉を60度に立てかけただけの“核シェルター”の中で無事生き延びた二人は互いに励ましあい、今日は牛乳配達人が遅れているねと言いながら雨水を溜めてお茶を入れ、健康のために日光浴をし、日常生活を取り戻そうとする。放射性物質を浴び、みるみるうちに二人の容貌は変化していく。髪が抜け歯茎から出血するが、二人は希望を捨てずに政府を信じて救援を待ち続ける。

作者ブリッグズはこの作品について、反核を宣伝するためのものではなく、核戦争の下で市民生活に何が起こるかを描きたかっただけだと語っている。丸顔で微笑を絶やさない善良な市民そのものといった老夫婦ジムとヒルダ。人類の未来が奪われたというのに無知で楽天的で希望を捨てず、信じることをやめない二人。二人の主人公はどこにでもいる普通の市民－我々読者自身でもある。我々はブリッグズが描く、刻々と変化していく二人の姿を通して、ごく普通の市民が死へと引きずり込まれていく様を目の当たりにすることになる。

もし、この作品が文字だけの小説だったら、読者はこれほどの衝撃を受けただろうか。

この作品を所蔵している大学図書館はたくさんあるようだ。本書は、語り継がれるべき「絵画分野」の作品として、図書館で大切に所蔵していかなければならないのだろう。

請求記号：A083-9419-4（横浜地下下層）

*データベースJapanKnowledgeより引用

図書館からのお知らせ

横浜・平塚共通

◎夏季長期貸出について
　貸出期間：７月16日(月)～９月14日(金)
　返却期限：９月29日(土)
　対　　象：学部生・科目等履修生
　冊　　数：10冊
◎一般公開休止について
　前期試験実施に伴い、下記期間中の一般公開を休止いたします。
　期　　間：７月２日(月)～７月30日(月)
◎一斉休暇に伴う休館について
　期　　間：８月13日(月)～８月16日(木)

横　浜

◎夏季休業期間中［８月７日(火)～９月20日(木)］の開館スケジュールについて
　開館時間：9：30～18：00
◯視聴覚資料室は閉室します。
◯3Fおよび2F 第二閲覧室は閉室します。

※日・祝日および一斉休暇期間は休館です。

平　塚

◎休日開館について
　前期試験実施に伴い、下記日程を開館といたします。
　日　　程：７月８、15、22、29の各日曜日
　開館時間：9：10～16：50

◎夏季休業期間中［８月７日(火)～９月20日(木)］の開館スケジュールについて
　開館時間：9：10～16：50
◯第２閲覧室は閉室します。

※土・日・祝日および一斉休暇期間は休館です。

編集後記

反理想郷（ユートピア）、またはそのような暗黒の世界を描いた作品を「ディストピア」という。先ごろ亡くなった作家レイ･ブラッドベリ（Ray Bradbury,1920-2012）の1953年の代表作『華氏451度』はディストピアの名作として名高い。

主人公は本を焼くことを仕事にする焚書官モンターグ。本を持つことが禁じられ、密告が奨励される監視社会。人々は〈海の貝〉という受信機を耳に付け、一方的に流される音楽と物語に浸り、テレビ壁の「家族」と対話する。感情を強く揺さぶるものは社会から排除され、人は簡単に死んでいくが、人々はすでに悲しみの感情からも遠くにいる。

空虚な世界を描いたこの小説。だがこの作品の真の暗黒は、発達した文明社会で堕落していく人間の姿にある。

モンターグの上司ビーティは語る。大衆の心をつかむには必然的に単純化につながらざるをえない。書物の内容は可能な限り低いレベルに落とされる。何もかもが簡約版になり、頭が回転しなくてもすむよう、本には漫画や写真が増えるようになる。知性は劣等意識や軋轢を生み出す災いの元であり、皆が平等で幸福になるためには、知の源となる書籍は焼かれなければならない。そしてこれらすべては、押し付けられたものではなく、他ならぬ大衆が選んだことなのだ、と。

雑学と称して簡易版で効率よく手に入れる“知識”。絵が増えて親しみやすくなったと喜ばれる教科書。込み入ったことを考えさせられるよりは、分かりやすく単純化されたものが喜ばれ評価される。個々の生活の中でも、かつて自分でやっていたことを今は機械がやっていて、気がつくと何もできなくなっている。我々もそのうち、本を焼き始めるのだろうか。

ふと気がつくと、ディストピアが大きな口を開いているのが見える時がある。

（N.E.）

今号の表紙

1909年の自転車通販カタログ"Bicycles"と1921年の毛皮の通販カタログ"Willard Furs" の表紙。アメリカにおける大量消費社会の始まりを告げる歴史的資料である。詳しくは6ページ「2012年横浜図書館展示 アメリカの商品カタログに見る大量消費社会の誕生」を参照。